

本願寺新報

hongwanji journal

1月9日(日曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所 本願寺新報社

京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派(西本願寺)

〒600-8501

本願寺出版社内

電話 075(371)4171(代)/FAX 075(341)7753

号 外

一月九日、ご発布

一月九日午後一時五十分から本山・総御堂において「親鸞聖人七百五十回大遠忌」についてのご消息発布式が行われ、ご門主が親された。

親鸞聖人の大遠忌法要は五十年ごとに営まれる年忌法要。七百回大遠忌法要は、昭和二十六年に厳格された。

宗門では、大遠忌の意義を深めるために、基本(長期)計画の策定を進めている。このたびのご消息発布式は、宗門における年間最大の法要である御正忌報恩講(九日・十日)の初日午後二時から初夜法要に引き続き行われた。日曜とも重なり全国から多くの僧侶、門信徒が参拝。発布式に出席の来賓など其に本山一帯は賑わっている。午後四時半からは、阿弥陀堂前での「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」の南礼立礼式、引き続きご消息発布記念のついでが行われる。

(二)消息とは、手紙のことです。宗門では、親鸞聖人や歴代宗主およびご門主が僧侶、寺院、門信徒へ宛てた書状のこと。

親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息

平成二十四年一月十六日は、宗祖親鸞聖人の七百五十回忌にあたります。本願寺では、ご修復を終えた御影堂において、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要を平成二十二年四月よりお勤めすることになりました。このご勝縁に、聖人のご苦労をしのび、お徳を讃えるとともに、浄土真宗のみ教えを深く受けとめ、混迷の時代を導く灯火として、広く伝わるよう努めたいと思います。

親鸞聖人は承安三年に御誕生になり、九歳で出家得度され、比叡山で学問と修行に励まれました。しかし、迷いを離れる道を見いだすことができず、二十九歳の時、聖徳太子の示現を得て、源空聖人に遇われ、本願を信じ、念仏する身となりました。三十五歳の時、承元の法難により、越後にご流罪となりましたが、後にはご家族を伴って関東に移り、人びとと生活をもとにし、自信教人信の道を歩まれました。晩年は京都で、ご本典の完成に努められるとともに、三帖和讃など多くの著述にお力を注がれ、九十歳を一期として往生の素懷を遂げられました。

親鸞聖人によって開かれた浄土真宗は、あらゆる人びとが、阿弥陀如来の本願力によって、往生成仏し、この世に還って迷えるものを救うためにはたらくという教えです。南無阿弥陀如来の名号を聞信するところに往生が定まり、報恩感謝の思いから、如来のお徳を讃える称名念仏の日々を過ごさせていただくのです。

仏教の説く縁起の道理が示すように、地球上のあらゆる生物非生物は密接に繋がりを持っています。ところが今日では、人間中心の考えがいよいよ強まり、一部の人びとの利益追求が極端なまでに拡大され、世界的な格差を生じ、人類のみならず、さまざまな生物の存続が危うくなっています。さらに、急激な社会の変化で、一人ひとりのいのちの根本が揺らいでいるように思われます。私たちは世の流れに惑わされ、自ら迷いの人生を送っていることを忘れがちではないでしょうか。お念仏の人生とは、阿弥陀如来の智慧と慈悲とに照らされ包まれ、いのちあるものが敬い合い支え合って、往生浄土の道を歩むことであります。如来の智慧によって、争いの原因が人間の自己中心性にあることに気付かされ、心豊かに生きることのできる世の中、平和な世界を築くために貢献したいと思ひます。

私たちの先人は、厳しい時代にも、宗祖を敬慕し、聴聞に励まれ、愛山護法の思いとともに、助け合ってられました。この良き伝統を受け継がなければなりません。しかしながら、今日、宗門を概観しますと、布教や儀礼と生活との間に隔たりが大きくなり、寺院の活動には門信徒が参加しにくく、また急激な人口の移動や世代の交替にも対応が困難になっています。

宗門では、このたびのご法要を機縁として、長期にわたる諸計画が立てられ、広く浄土真宗が伝わるよう取り組むことになっています。七百回大遠忌に際して始められた門信徒会運動、重要な課題である同朋運動の精神を受け継ぎ、現代社会に応える宗門を築きたいと思ひます。そのためには、人びとの悩みや思いを受けとめ共有する広い心を養い、互いに支え合う組織を育て、み教えを伝えなければなりません。あわせて、時代に即応した組織機構の改革も必要であります。

それとともに、各寺各所で勤められる大遠忌法要を契機に、その地に適した寺院活動や門信徒の活動を、地域社会との交流を、そして、寺院活動の及ばない地域では、一層創意工夫をこらした活動を進めてくださるよう念願しております。

宗門の総合的な活動の新たな始まりとして、皆様の積極的な協賛ご協力ご参加を心より期待いたします。

平成十七年
二〇〇五年

一月九日

龍谷門主 釋 即 如